

ロシントンの勇行

やまとの翁

時は千七百五十年の春、空うらゝかに風長閑な一日の午後、場所は北米バージニア洲の北に當りて著明なる河流に沿へる森林地の一帯。

そこへには測量機械が散亂して居る、數人の人々は新緑滴る樹蔭に休息して、こゝに三人彼處に五人、身装やら容貌やらで見れば此等は田舎の荒地を開拓せる工夫の一群だと知れる。

今しも彼等は漸と晝食を済した所なのである。

一群から離るゝこと約二三丁、丈高く骨格逞まじき一人の少年、端然たる姿勢を備へ確乎たる歩調で以て逍遙して居る。年齒まさに十有八、併も其容貌には年に相應しからぬほどの有爲果敢の氣象を備へて見へる。

忽ち一聲悲鳴の叫が聞えた。間もなく又一聲、續いて響く亂調の喚聲、聲はますますしく婦人の聲だ。

最初の一聲で、少年は僅に重々しく頭を其方向に轉じただけであつたが、急激な亂調の叫を聞くに至つては、彼は疾風の如く身を翻へして其方向に當つた森の方へと衝き進んだ。

と見れば、彼は其森を出て河岸へと出た。今しも彼の仲間がこの河岸に群て、しきりにがや／＼と騒いで居る、真中には一人の婦人、二人の工夫に捕へられたまゝ、一生懸命にふりはなそゝともがいて居る。前の叫聲は云ふまでもなく、此婦人から出たのである。

少年の急いで近づき來たのを見るや否や、婦人は必死の聲を絞り出した。

「オー、貴下、どうか……どうか助けて下さい」

こゝを離さして下さい、家の子供……可愛い坊が溺れてるのです、それに……それにどうしても離してくれない……」

甲「まるで發狂の様なのだよ、離したら直飛び込もうといふんだから」

乙「この早瀬だもの、なんの事はない、見る中に粉微塵だ」

少年は殆之等の問答を待つて居ることが出来なかつた。と言ふのは、彼の子供といふのは、少年のよく知つてゐる今年四歳になる活潑の男の兒で、其丸々と肥えた蔷薇色の頬、美しい碧の眼、麻の様な房々とした縮れた髪は、何人といへども愛せざるを得なかつた子なのである。

平生自分の庭内で遊んで居たのが、今日は垣の外の開いてゐるのを幸に、母親の目を脱して庭の外

へ出て、今しもこの激流の岸邊に立つて、身を屈めて水面をのぞき込まうとした所であつた。之を見た母親が驚の餘り、思はずも發した叫は、不幸にも變事を速めたに過ぎなかつた。とゆゑのは子供は母親の叫に驚いた所から、忽身重の平均を失つて、あなやと見る間に岩を噛んで渦まく激流の中に、無殘にも陥込んで仕舞つたのである。

夫つといふので數人の男は、直に駆け附けた。まさに子供に續いて飛ぶ込まうとしたのであつたが、しかし、屹岨としてけづりなせる岩石に激して、深藍色の水一面に、白沫澎湃として涌かへる急流の物凄さに膽を冷されたのと何處にまひ込まされたものか、も一、蔭も形も分らなくなつたといふ所から、殘念にも其企を中止した所なのであつた。

敢爲なる少年に取つては然らずだ。眞先に彼は

上衣を脱いだ、續いて彼は河岸の端に衝つ立つた

そして恐るべき眼下の光景に忙はしく其炯々たる

眼を走せながら、縦横に奔逸せる急流と最危

険に見ゆる斷岩とを一瞥して、游泳の方向を定め

たるは、實に一瞬間に過ぎなかつた。といふのは

少兒の衣服でもあらうか、水面にチラと白いも

のが見えた、もはや顧慮へる隙もない、身を躍ら

せて此敢爲なる少年は、逆まく急流に飛び込ん

だ。

『オー神よ、彼こそ妾の小兒を助けて呉れるに違

ない。あれ〜彼處に……オー坊よ〜今に助け

て呉れるよ』

母はも一生涯命である。人々は斷岸の端先へ

衝き進んで各々其熱心の眼を少年の進行に注いで

居る。急流は容赦なく彼を流し去つて、譬はば嵐

が秋の木の葉を弄んでるかの如くである。

見物の息は悉く死した、其顔色は水の夫よりも

尙青い。

嵐に於ける木の葉に似たらん少年は、あなやと

見る間に、轟然たる響と共に白沫天に朝する絶壁

に衝き當つて、骨も肉も微塵に粉碎したかど見れ

ば又一洩千里の急流は、小鳥をねらつて射來る早

鷹の如くに彼を流し去つた。併も次の瞬間には忽

突如として程遠き下流の表面に顯れて居る。

かくて斷岩怒濤の間をぬけつくつたりつ、此尊ひ

べき少年は、抜手をさつて進み行く。岸邊の人々

は、この勇まじき働振に見惚れて、呆然として

聲も出ない。梢を拂ふ颯々たる風の音のみ、轟々

たる激水の響と和して、一層光景の凄愴を増すの

みである。

(未完)

一口ばなし

●或人がよそへ御遣ひ物に入尾の大鏝を持って行きました。所が、先方は大變な不機嫌で、いやも一散々に怒り散らすので、此方は少し勃然して、何故そんなに怒るかど聞いた所が『鏝を入尾持つて來たのだから。しかれ、いふんだと思つて』といふから『いや夫は大變な違だ、私の方では、よかれ、の積で八尾持つて來ました』

●或貧乏人の酒香が、毎夕飯の時、おかみさんに二錢づゝ渡して酒を買つて來て貰つて夫を何よりの樂にして居ました。所が或時大變お金に困つて、おかみさんに相談しました所、おかみさんは、いくらといふことを聞いて『その位なら』と

いつて澤山一厘錢を、サシに挿いたのを出して來ました。主人は吃驚して『どうしてこんなに、貯めて居つたのか』と聞いた。すると、おかみさんは『あなたか毎晩二錢づゝお酒を買つて來いといつて、お渡し下さるのを、すまぬと思つたが、一錢九厘にして其一厘を貯めて置きましたのです。今日の役に立つたのです』と答へました。そこで主人は大變に感心して『それでは、これからお酒を已めれば、一層澤山貯るだらうから、今晚かぎりも一已めにしよ』とゆゝので、お酒を已めました。

さてそれから暫たちまして、又々お金に困つたことが出來たので今度こそはと思つて早速おかみさんに相談しました、所がおかみさんの云ふには『もうわれつきり、あなたお酒を買つたことがあ